（６） １中２小分離型　愛川町

愛川中学校
半原小学校・田代小学校

ア　教育目標

（ア）教育目標（愛川中学校区の目指す子ども像）

自立・協働　～たくましく生き抜く力を持つ子～

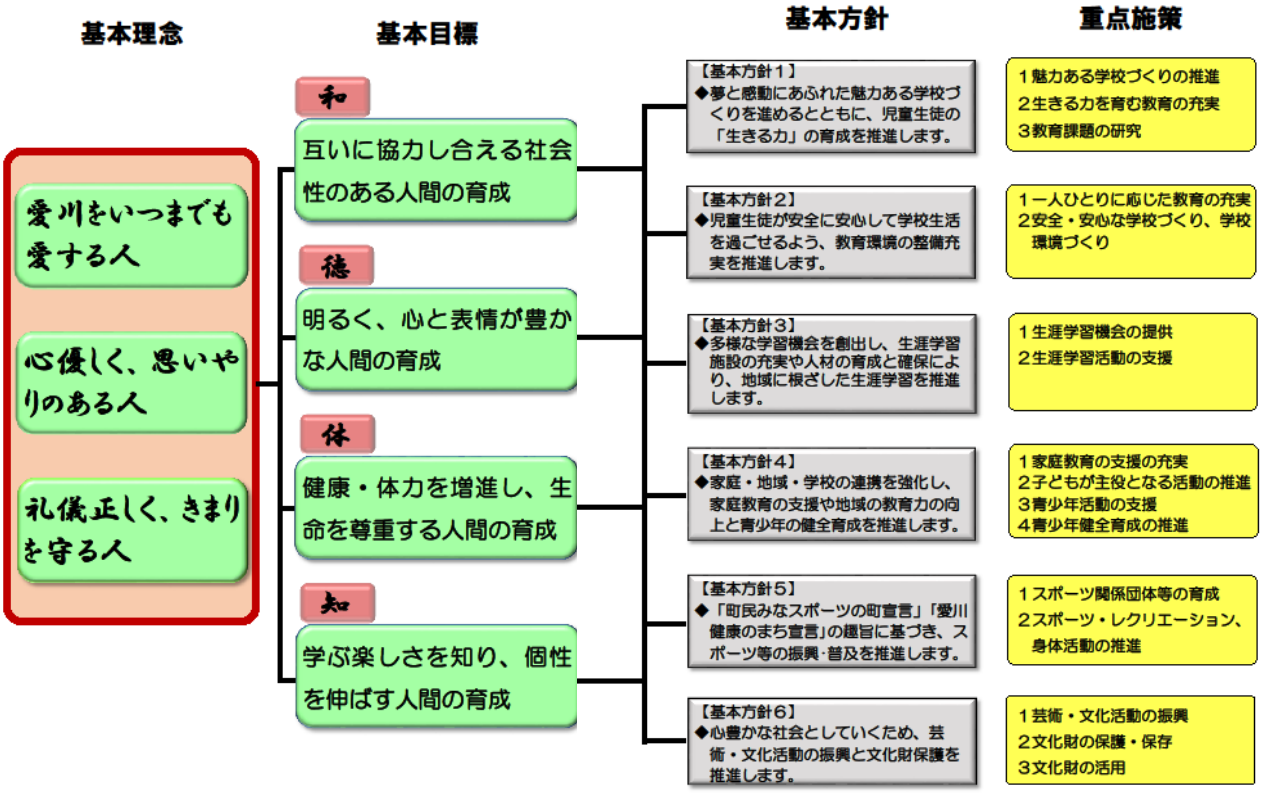
（イ）教育目標の背景

愛川町では、平成 27 年度に策定した「愛川町教育大綱」において、「未来の愛川町を担う人材の育成をめざして」というテーマのもと、次の体系図のとおり「愛川をいつまでも愛する人」「心優しく、思いやりのある人」「礼儀正しく、きまりを守る人」の３つを基本理念としました。また、「和・徳・体・知」の一文字で象徴される４つの基本目標を定め、学校・地域・家庭が協力しながら調和のとれた人を育てています。

これらの基本目標を具現化するために、平成 28 年度から、中一ギャップの解消や学力向上等を図るため、町内全ての中学校区で小中一貫教育を推進することとなりました。

特に愛川中学校区は、以前から乗り入れ授業など小中連携の取組が進んでいたことから、町の教育課題研究指定校として、児童生徒指導や防災教育、外国語教育を中心とした小中一貫教育の研究を推進していくことになりました。

教育振興基本計画の体系図



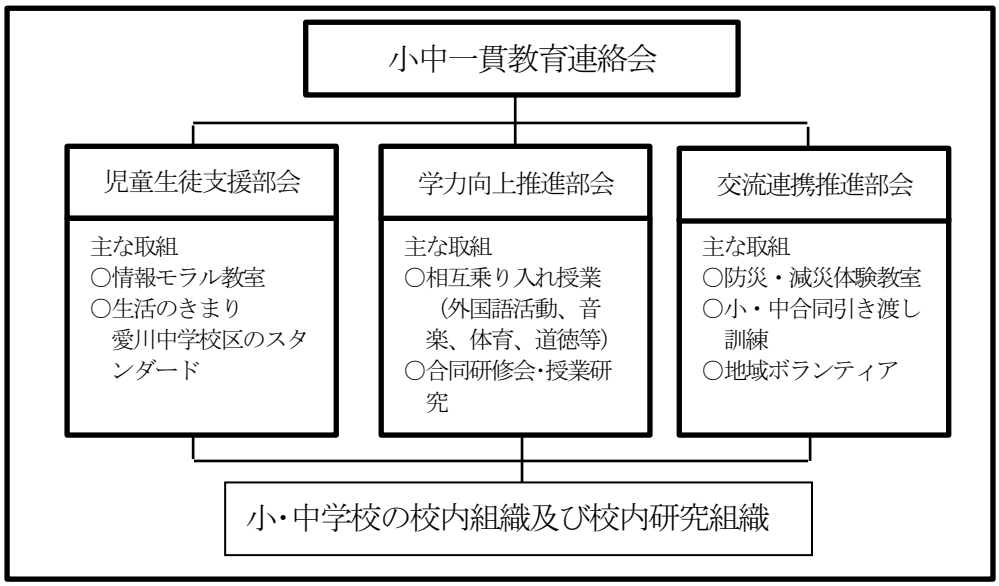
イ　推進組織

(ア) 中学校区組織

〔小中一貫教育連絡会〕

・中学校区の代表者と担当者が各学校における小中一貫教育に係る事案について話し合い、共通理解を図ります。

・愛川中学校区においては、次の図のとおり「児童生徒支援部会」「学力向上推進部会」「交流連携推進部会」の３専門部会を設置し、取り組んでいます。



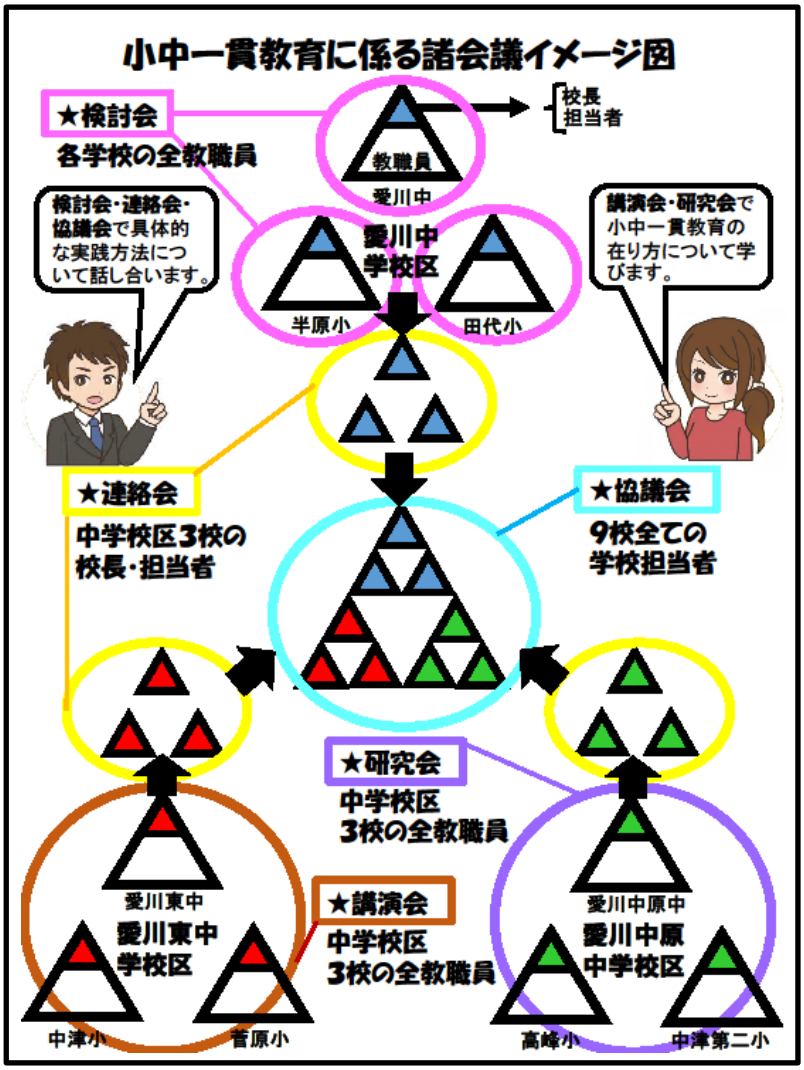
(イ) 教育委員会組織

〔小中一貫教育協議会〕

・各学校の小中一貫教育担当者が一堂に会し、町全体の小中一貫教育推進について話し合い、共通理解を図ります。

関係組織図

小中一貫教育検討会	各学校において全教職員が小中一貫教育に係る事案について話し合い、共通理解を図る。
小中一貫教育連絡会	中学校区内３校の校長や担当者等が各学校における小中一貫教育に係る事案について話し合った結果を持ち寄り、共通理解を図る。
小中一貫教育協議会	各学校の担当者が、町全体の小中一貫教育推進について話し合い、共通理解を図る。
小中一貫教育教科別研究会	各学校の教科別の担当者が、小中一貫教育に係る教育課程編成について話し合い、共通理解を図る。
小中一貫教育講演会	小中一貫教育の専門家を講師として招聘し、中学校区毎に開催することで、小中一貫教育に対する理解を深める。
小中一貫教育研究会	中学校区内３校の全教職員が小中一貫教育に係る事案について話し合い、共通理解を図る。



※上記イメージ図に記載のない「小中一貫教育教科別研究会」は各学校の教科担当者が教科別に集まり、９年間を見通した教育課程の編成について話し合います。

(ウ) コーディネーター

〔小中一貫教育コーディネーター〕

愛川中学校区において、小・中学校の教職員が「乗り入れ授業」を実施する際のコーディネートや「乗り入れ授業」実施に伴う教員不在時の後補充にあたります。

また、学力向上推進部会における思考ツールとしてのノート指導の研究を推進します。

ウ　主な取組

(ア) ９年間を見通した教育課程編成

〔グローバル科〕

外国につながりのある児童・生徒が多い本町の実態から、国際理解や異文化理解、ダ

イバーシティの考え方を理解する特色ある教育「グローバル科」を研究するため、小学１年生から中学３年生までの９年間を見通した教育課程編成について取組を進めています。

小・中学校共通の研究方針　（愛川中学校区）

〇自ら課題を認識し、論理的に考え、判断し、行動できる力を育てる。

〇日本の伝統・文化を理解し尊重するとともに、多様な価値観を受容し、主体的に国際社会に参画する力を育てる。

〇異学年との学習活動や地域連携、国際交流を通じて、他者を思いやり、協働して新しい価値を創造する力を育てる。

愛川中学校では、２学年で国際理解・国際交流事業として、神奈川工科大学と連携することで、大学に在籍する留学生７名（パキスタン、中国、イラク、韓国、マレーシア）が中学校を訪問して小グループ単位での交流を行いました。

交流を終えた生徒からは、次のような感想がありました。

・日本人だから英語は必要ないと思っていたけれど、留学生とまったくコミュニケーションがとれなかったので、英語は必要だと思いました。

・自分の英語が留学生に伝わって良かったです。

・他の国の人と交流すると、普段生活している私たちにはわからない日本の良いところがわかりました。

〔学び方育成カリキュラム〕

一貫教育教科別研究会において、小・中学校教員が担当教科ごとに集まり、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点で、９年間を見通した教育課程編成について話し合いを進めています。

学び方育成カキリュラム作成に向けた検討のまとめや今後の方向性（全授業・全教育活動）　（愛川中原中学校区）

	検討の観点	基礎定着期				充実接続期			発展確立期	
		小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
全授業・全教育活動	小中一貫教育目標	「主体的に人や社会と関わり、よりよく学びつづけようとする児童・生徒の育成」								
	目標達成に向けて特につけたい学ぶ（学び続ける）力 …白水Tより	○問題に気づく力 ○伝えたいことを人に伝える力 ○他人から学ぶ力 ○新しい答えを見つけ出す力 ○自分のやり方を振り返ってもっと良くしようとする力 ◆各期別に下の欄とあわせて具体的な子どもの姿として表示する必要がある 講師からはこれを具体的に観とる子どもの姿としていく必要性を示された。								
	各場面における子どもたちの姿 ◆「話す・聴く・学びあう」	話す　○相手を意識して話す				○相手に伝わりやすいように話す			○相手に理解してもらえるように話す	
		学びあい　○自分の考えを持つ → ○様々な考えを比較する → ○相違点・共通点・疑問点を整理する → ○お互いの考え方を広げたり深めたりする → 多様な意見を受け入れ論点を整理しながら新しい考え方を作り上げる								
		聴く　○相手を意識して聴く				○自分の考えと比べながら聴く			○自分の考えを深められるように聴く	
	学ぶ（学び続ける）力をつける授業 【授業モデル】	○9年間を見通して、「4段階の学習過程」「5つの実践」を意識した授業づくりを行なう。 【問題把握（つかむ）】 ↓ 【自力解決（調べる）】 ↓ 【集団解決（深める）】 ↓ 【まとめる（振り返る）】 ◆上記をベースに内容・表現等については、保護者に分かりやすいものになるように文言等を修正していく。				【5つの実践】 ①目標（めあて・ねらい）を最初に示す授業 ②課題を立て自力で解決する授業 ③生徒の間で話し合う活動がある授業 ④自分の考えを発表す機会がある授業 ⑤学習の振り返りのある授業 ◆4つの段階の学習課程と関連させて、どのようなことを大切した授業をするのかを入れていく。文言等については同様に修正していく。				
	授業に向かう教師の指導観や指導姿勢	○「困った」からスタートしているか？「わからない人」と意識して聞いているか？「困った」が言える教室（学習環境）になっているか？ ○「閉じた発問（一問一答」と「開いた発問（オープンクエスチョン）」を意識しているか？ ○「何がわかった」「どうわかった」を子ども自身の言葉で説明させているか？ ○子どもの発言を教師が途中で取り上げていないか？そのことが子どもの発言や考える機会を奪っていないか？ ○聞いていればわかるような子どもの質問に簡単に答えるなど、生徒に不必要に親切にしていないか？それが生徒の成長を奪っていないか？ ○「答えが出れば良い」とするスタイルになっていないか？「なぜ？」「どうして？」を生徒に問うているか？								
	学級経営 授業規律や学級風土	○安心できる学級風土（協力・寛容、多様な考え・価値観の受容，わからないといえる雰囲気） ○規範意識の徹底（学習規律・生活習慣など）								
	小中連携の取り組み	○あいさつ運動・合唱の取り組み・小学校運動会の中学生ボランティア・6年生の中学校体験見学・中学英語科教諭の小学校訪問授業・合同引き渡し訓練								

（イ）合同講演会・研修会等

〔小中一貫教育講演会〕

各中学校区において、小・中学校の全教職員を対象に小中一貫教育推進のための講演会を実施しました。文部科学省参与や小中一貫教育に深く関わった大学教授を招聘し、ともに同じ話を聞くことによって、小中一貫教育についての理解を深めるとともに、中学校区の児童生徒をみんなで一緒に育てるという気運が高まってきました。

また、講演会終了後に、小グループで話し合うことによって学校間を越えた情報交換ができ、小・中学校相互の理解を深めることができました。

〔小中一貫教育研究会〕

愛川中学校区においては、各学校が独自の課題を設定した研究会を主催し、他校にも参加を呼びかけ実施しました。

児童生徒指導や授業改善などの課題についての研究会を通して解決の視点を持ち、指導力向上を図ることができました。

〔小・中合同引き渡し訓練〕

大規模災害に対応した引き渡し訓練を行いました。実際の災害時には小・中学校それぞれが兄弟姉妹を引き渡す場合があることから、引き渡しについてのルール等について学区で話し合いと準備を進め、計画的に実施しました。

⑵ 授業研究

学力の向上を目指して、ＩＣＴの効果的な活用を含めた授業研究に取り組んでいます。中学校の研究授業に小学校の教員が、小学校の研究授業に中学校の教員が参加することで、中学校区で設定した「めざす子ども像」の実現に向けた児童生徒につけたい力等について協議を重ねました。その結果、各校の授業改善の方向や視点が定まり、研究を深めることができました。

また、先行してＩＣＴを導入してきた小学校の授業を参考にして、中学校でもＩＣＴを活用する授業場面が広がりました。

(エ) 乗り入れ授業とティーム・ティーチング

小学校から中学校への円滑な接続や「グローバル科」の研究をするため、兼務発令された中学校英語科の教員が小学校中学年の外国語活動等の指導に取り組んでいます。また、小学校５年生の連合音楽会、小学校６年生の連合運動会等に向け、中学校音楽科・保健体育科の教員もティーム・ティーチングとして指導しました。

さらに、小学校の教員が中学校において道徳の授業も実施しました。中学校の道徳の時間の年間指導計画に合わせて、事前に資料や道徳的価値について情報共有し、小学校の学校長や教員による授業を実施しました。なお、小学校の教員が授業をする際の後補充は、小中一貫教育コーディネーターが担当しました。

(オ) 児童生徒の交流

〔運動会におけるボランティア協力〕

・小学校の運動会に中学校の生徒がボランティアとして参加し、運営の補助を行いました。小学校高学年の児童数が減少している中で、小学校の様子をよく知っている中学生が運動会の運営をフォローすることは、とても有効でした。

〔中学校の生徒による情報モラル教室〕

・中学校の生徒会を中心とした生徒が、警察のスクールサポーター等の指導を受け、ＳＮＳを利用した際の危険性や注意点などの情報モラルについて、児童に伝える活動を実施しました。大人から教わるのではなく、身近なお兄さんお姉さんのような中学生が実体験を踏まえて伝えることで、児童はより現実感を

持って理解することができました。また、伝える側の中学生は自ら学ぶことを通して、情報モラルの意識をさらに高めることができました。

〔地域における防災・減災教育〕

・ボランティア団体の協力を得て、児童と生徒が交流しながら、災害時の炊き出しや消火を体験しました。互いに助け合うことの大切さについて、理解を深めることができました。

〔連合運動会の朝練習でアドバイス〕

・小学６年生の連合運動会に向けての朝練習において、陸上競技部の中学生がアドバイスをしました。中学生は部活動の日常の取り組みが生き、６年生の児童にとっても効果的な練習方法を知ることができました。

〔小学校における職場体験〕

・中学２年生の職場体験において、小学校で教員の仕事を体験した生徒もいました。この体験を通して、生徒は児童と触れ合う教員という仕事の難しさや楽しさを学びました。

〔ミニ連合運動会の実施〕

・雨天のため中止となった連合運動会を、各中学校区の小学６年生が２校で集まってミニ連合運動会として実施しました。お互いに協力し合い競い合う中で、同じ中学校に通うという仲間意識が芽生えました。

(カ) 家庭・地域との連携

町の広報誌「広報あいかわ」や学校便りを通して、小中一貫教育の目的、各中学校区における推進状況などを家庭や地域に伝えています。

エ　小学校教員が中学校にできること、中学校教員が小学校にできること

〔小⇒中〕

小学校教員が積極的に中学校の研究授業を参観したり、中学校教員と学習指導案を一緒に考え実践したりすることにより、さらなる授業改善や授業力向上につながっています。児童にとっても中学校入学後も小学校教員が応援してくれていることが伝わり、大きな励みにもなっています。

また、学習規律や清掃のやり方を同じ中学校に入学する小学校の全クラスでスタンダード化することで、小学校間のギャップの解消を図り、円滑な中学校生活につなげられるよう努めています。

〔中⇒小〕

兼務発令された中学校英語科教員が小学校中学年の外国語活動等の指導に当たることにより、小学校教員にとって専門的な指導法の参考になっています。

また、音楽・保健体育など、他の教科でも中学校教員の専門性を生かした指導により児童の力を大きく伸ばすことができました。

中学校教員が、入学前の児童の様子や実態を知り、入学後の中学校での指導に生かすことができるとともに、小学校で顔見知りになった教員が中学校にいることで、児童にとっても安心して進学できる効果がありました。

オ　成果と課題

〔**乗り入れ授業**を活用した外国語活動について〕

平成 29 年度から「外国語教育」を重点として、愛川中学校へ英語科教員を加配配置し、その英語科教員に兼務発令をかけることで小学校に派遣しています。（以下、兼務発令を受けている中学校の英語科教員を「授業支援者」と記述する）

【平成 29 年度】

【半原小学校】各学年２クラス
　３・４年生　学級担任＋授業支援者　各学年；年間８時間
　５・６年生　学級担任　＋　ＡＬＴ　週１時間　年間 35 時間
【田代小学校】各学年１クラス
　３・４年生　学級担任＋授業支援者　各学年；年間 16 時間
　５・６年生　学級担任　＋　ＡＬＴ　週１時間　年間 35 時間

３・４年生の授業形態は、小学校の外国語活動主任と授業支援者が相談しながら計画を立てていたが、授業は授業支援者が中心となって行うことが多かったことが次年度への課題となった。しかし、３・４年生の児童にとっては英語を身近に感じることができ、外国語活動の時間を楽しみにしていた。

また、平成30年度は、新学習指導要領の先行実施として小学校３・４年生で35時間、５・６年生で70時間の外国語活動を行っています。

【平成30年度】

３・４年生	学級担任＋授業支援者	週１時間	年間35時間
５・６年生	学級担任＋ＡＬＴ	週２時間	年間70時間

新学習指導要領の先行実施をするにあたって課題となったのが、①既に履修した内容があること②文部科学省で提示する移行期間中の学習内容（３・４年生15時間、５・６年生50時間）では、先行実施する授業時数に足りないこと③平成29年度の３年生と４年生の英語活動の時間数が半原小（２学級）と田代小（１学級）で異なり、履修している時数や内容に違いがあったことが上げられます。そこで、履修した内容を洗い出し、カリキュラムを組み立てるところから検討を始めました。

このように、２つの小学校の履修のズレを解消するようにカリキュラムを作成することで、中学校では同じ内容を履修した子ども達が、同一にスタートすることでスムーズに学習に入っていくことができるようになります。

また、昨年度の反省を生かし、児童が生き生きと授業に参加する姿を引き出すために、学級担任を学習者のモデルとして改めて意識することで、児童と同じ目線で外国語に関わる学級担任を見ることで、児童は共に学んでいこうとする気持ちが芽生え、積極的に学習活動に関わるようになりました。

今後の課題として、「書くこと」に対して、児童が抵抗感を持たずに学習できるよう工夫した授業づくりを進めていきます。

〔学び方を身に付けるための指導法について〕

「主体的・対話的で深い学び」について、中央教育審議会答申（平成28年12月21日）では、次のように説明されています。

① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

③　習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

そこで「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、愛川中学校では、「どのように学ぶか」の視点から思考ツールの研究に取り組んできました。

平成 30 年度は、児童・生徒がノートを自分なりに工夫してつくることによって「考える力」と「書く力」が鍛えられるとともに、話の内容やひらめき等をメモすることによって「聞く力」と「集中力」がつくと仮説を立て、小・中学校９年間の発達の段階に応じて活用できる思考ツールとしてのノート指導について、国語のノート指導に重点を置いて学力推進部会を中心に研究を進めました。

＜教員に取ったアンケート＞

〔小学校〕

・必要なことをメモするなど、自分から学習に取り組むことが増えた。
・自分にとって見やすい、わかりやすいノートを書こうという気持ちが子どもたちに出てきた。
・他の児童のノートを紹介することで友達から吸収し、自分の学習に繋げることができた。

〔中学校〕

・学習面も含め、小学生と中学生で学習の進め方の違いが明確になった。その違いの上に、授業後に振り返りを書く等、共通して取り組めるものができた。
・授業用ノートと別にライティングノートを持たせ、チェックすることで家庭学習の習慣化と意欲の向上を図っている。

今後の課題として、実際の授業の中では、児童生徒一人ひとり違いがあり、同じ思考ツールを使ったり、同じノートの書き方をしたりすることが一人ひとりの思考方法に合っているとは限りません。そこで、中学校卒業時には自分に合った学び方を身に付けられるよう、小学校から段階的に多様な思考ツール等を用いることで、選択肢を増やしていきたいです。また、教員も児童生徒一人ひとりに合った学び方を提供できるよう研究を継続していきます。

10　パイロット地域の実践

（１）小中一貫教育カリキュラムワーキンググループによる取組み　　二宮町

小中一貫の教育目標を実現するためには、義務教育９年間を一貫した系統的なカリキュラムを編成することが必要です。そして、小中一貫教育を実効性のあるものとして実施していくためには、編成したカリキュラムが日々行われる授業で意識されていることが大切です。

それぞれの校種の教員が行っている、児童・生徒の発達の段階を踏まえた指導において配慮していることや、児童・生徒は何ができるようになっているのか、どのような目標をもって指導しているのか、などということを、顔の見える関係の中で理解していくことが大切です。例えば、校種を越えた授業公開、小・中学校教員間の授業参観や振り返り、小・中学校教員の交流や相互理解などは、その一例となります。

(ア) 小中一貫カリキュラムワーキンググループの設置

二宮町では、義務教育９年間を一貫した系統的なカリキュラムを編成するにあたり、10教科等に分けた小中一貫カリキュラムワーキンググループを設置し、小・中学校全教員がいずれかに所属し、日々の実践の中で真に機能するものを目指して、取り組みを進めています。

９年間を見通したカリキュラムを作成するため、新学習指導要領の各教科等の解説を読み込み、それぞれ異校種や異学年に関して記述されている部分に焦点をあて、その抜粋資料を作成して、小中一貫カリキュラムを作成する前段階の足掛かりとしました。

また、各教科等のワーキンググループにおいて、児童・生徒の実態、目指す子ども像、育てたい力等について協議を行い、各校種での現状と課題等を把握し、情報共有を図りました。

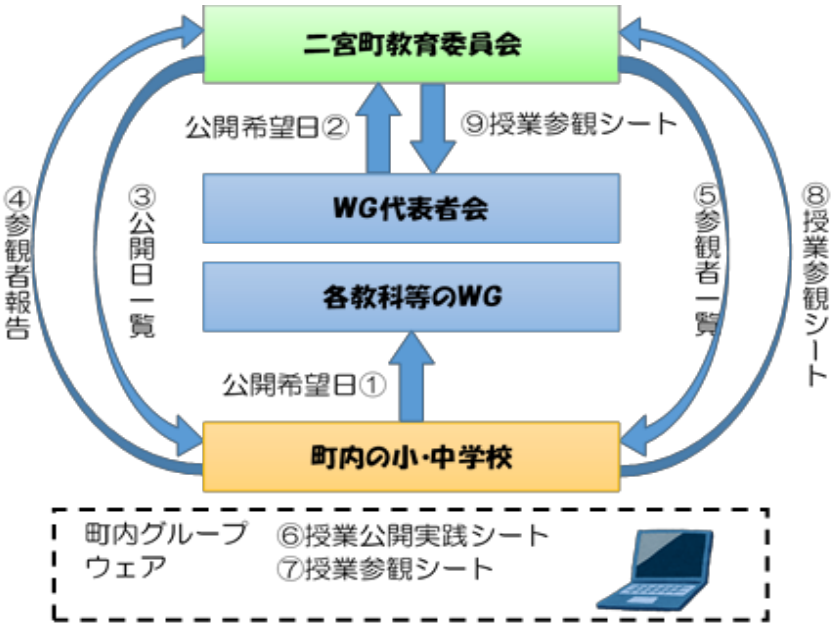
小中一貫カリキュラムを作成するにあたり、全教員で指導内容や児童・生徒の実態等について、丁寧に情報共有をし、小学校は中学校について、中学校は小学校のことをよりよく知り、理解することが何よりも大切です。そこで、各教科等のワーキンググループの取組として、全教員が異校種の授業を参観することとして、相互理解に努めています。

(イ) 小中一貫カリキュラムワーキンググループの運営の手順

小中一貫教育について理解を深め、共通理解を図るため、夏季休業中に、二宮町立小・中学校全教職員を対象に「小中一貫教育研修会」を行い、その後、教科等ごとに分かれて、ワーキンググループミーティングを行っています。ここでは、研修会での講師による講演の内容を振り返りながら、それぞれの教科等における各校種での児童・生徒の学習の様子や、育てたい力、めざす子ども像等について話し合いを行っています。

小中一貫教育研修会とワーキンググループミーティングを同日に行うことは、教員の出張の回数を１回にすることができることに加え、講演の内容を踏まえて、その後の話し合いを行うことができます。

また、校種相互の授業公開・参観については、小・中学校全教員が実施できるように、日程調整等を含めて、次のような手順で進めました。



① 各教員が９月から 11 月の間で、授業公開の候補日時を設定し(第２候補まで)、「授業公開日時希望票」を各校で教科等ごとに作成し、当該のワーキンググループ代表者に提出する。

② 代表者は５校から提出された希望日時等を取りまとめ、教育委員会に提出する。

③ 教育委員会で、日時の重なり等を考慮しながら授業公開日を確定し、全教科等の授業者・公開日時等の一覧を作成して各校に送付する。

④ 所属するワーキンググループの異校種の公開日の中から参観する日を決め、各校で取りまとめて、教育委員会に報告する。

⑤ 教育委員会で参観者を取りまとめ各校へ周知する。(参観者がいない場合もあり得る。)

⑥ 授業者は、参観者の有無に関わらず、授業公開実践シート(略案)を作成し、授業公開日の３日前までに、町内のグループウェアのフォルダに保存し、全体で共有できるようにする。(校内研や年次研等と兼ねている場合は、別様式の指導案でも可とする。)

⑦ 授業公開当日は、参観者数分の授業公開実践シート及び授業参観シートを授業公開校で用意する。

⑧ 参観者は参観後、授業参観シートに記入し、授業公開校の教頭を通じて、教育委員会に提出する。

⑨ 授業公開・参観が全て終了後に、第３回小中一貫カリキュラムワーキンググループミーティングを教科等ごとに実施し、授業公開・参観について振り返りを行う。

⑩ 全教科等の第３回小中一貫カリキュラムワーキンググループミーティング終了後に、第３回小中一貫カリキュラムワーキンググループ代表者会を実施する。

小中一貫カリキュラムワーキンググループ　授業公開実践シート

学校名	二宮町立[redacted]小学校	授業者名	[redacted]	教科等	外国語活動
月日	11月30日(金)	校時(時間)	3校時(10:45～11:30)	学年・組	5年2組
単元名／時間数	Hello,everyone. アルファベット・自己紹介				
本時のねらい	・アルファベットの大文字と小文字に繰り返し触れ、読み方と形に慣れ親しむ。 ・簡単な自己紹介をしようとする。 ・好きなものや欲しいものなどを表す表現に慣れ親しむ。				
授業の流れ (学習過程に沿って箇条書きで記入)	①あいさつ ②ABC Song ③Stand Up & Sit Down Game(名前のアルファベット) ④プレキソ英語 ⑤お名前は？ ⑥登場人物の自己紹介(We Can!1 P4) ⑦自分の名前 ⑧あいさつ				

※授業公開日の３日前までに、デスクネッツの文書管理の中のフォルダに保存してください。

小中一貫カリキュラムワーキンググループ　授業参観シート

学校名（二宮町立[redacted]中学校）　氏名（　[redacted]　）

参観学校名	二宮町立[redacted]小学校	授業者名	[redacted]先生	教科等	体育
月日	１１月２０日（火）	校時(時間)	５校時（13:25～14:10）	学年・組	１年1･2組
単元名／時間数	とびばこあそび（６/７）				
授業を参観して、参考になったこと、子どもの様子を見て感じたこと、異校種として初めて知ったこと等	安全面の確認（マットのずれを確認して直すなど）を、声掛け１回のみでできている子どもがたくさんいた。何より子どもたちが楽しそうに取り組んでいる姿が印象的であった。小１ながらも友だちを見て感想を述べたり、考えられたりしている姿に感動した。				
今回の参観をきっかけに、今後の自分の授業で意識したいこと等(特に小中のつながりを意識した視点から)	とび箱に対して恐怖感を抱いたまま中学校に上がってくる子どもが多少いる中、小１の段階から低めで、安全に配慮されている授業であった。小１ではあるものの、しっかり安全についての指導もされていたので、改めて自分の中学校での授業を考える機会となった。安全指導の徹底をしていきたい。				
その他、感想等	授業お疲れ様でした。ありがとうございました。				

※参観者は、参観後に記入し、授業公開校の教頭先生に、その場で又は授業後３日以内に提出してください。

⑵ 小中一貫カリキュラムワーキンググループにおける振り返り

異校種の授業を参観して、「参考になったこと、子どもの様子を見て感じたこと、異校種として初めて知ったこと等」について感想の一部を抜粋します。

＜小→中＞

中学３年生が与えられた課題に集中して取り組む姿に感心した。

話す、書く、聞く場面の切り替えが速い。教師の指示が速くても、きちんとついていく生徒が多い。グループ学習は、活発にならないと思っていたが、男女ともによく話し合っていた。

＜中→小＞

中学校と比べて、とても丁寧に一つひとつの指導を進めていると感じた。「関節」の理解が進むように、実際に体を動かして確かめることで、実感をともなった理解、学びになっていると思った。

インタビューの仕方や話し合いの進め方など、小３の時点で思っていた以上にしっかりと学習していると感じた。

小学校の教員が送り出した子どもの成長に気が付くことや、中学校の教員が小学生の力に気が付くことはとても大切です。その中で、授業公開・授業参観は、教員が異校種の発達段階や授業内容、指導方法等を知る良いきっかけになりました。

また、小学校での学習の上に、中学校での学習は積み重ねられていきます。児童・生徒が、資質・能力を身に付けていくために取り組む言語活動も引き継がれることで、円滑に学びの接続が実現すると考えられます。

学習指導要領により、それぞれの校種で身に付けた力を把握した教師たちが、児童・生徒の姿を通して実感を持って学びのつながりを意識することは、日々の教育実践に役立つことになると考えられます。

そのためにも、小中一貫カリキュラムワーキンググループで、児童・生徒の実態、目指す子ども像、育てたい力等について協議を行い、各校種での現状と課題等を把握し、９年間を見通したカリキュラムを作成するための、丁寧な情報共有をすることは大切だといえます。

また、「今回の参観をきっかけに、今後の自分の授業で意識したいこと等(特に小中のつながりを意識した視点から)」としては、次のような感想がありました。

＜小→中＞

小・中と共通して、何かを作業するときには、集中して作業していく時間を多くとることが必要だと思った。図工でも、小学校の時から静かに集中して作業する時間を増やし、中学校へつなげていきたいと思った。

小学校のうちから、人前で話す活動を多く取り入れたり、調べ学習の際には、より多様な方法を使って調べさせたりするなど、中学校の学習につなげられるようにしたいと思った。

体験を通して学ばせるのはもちろん大切だが、中学に行ったときに、言葉でしっかり説明できないと困ってしまう。言葉や文でまとめるということも意識して取り組ませていきたい。

子どもたちの発達に合わせた話し方や発問の仕方が大切と感じた。学習の結果だけ見るのではなく、どうやってこの答え、考えにたどりついたのかを注目し、そこをほめて伸ばしてあげたいと思った。

＜中→小＞

中学校でも人体の学習があるので、小学校で今日のように学習してきたことをしっかり復習し、その発展や深い学びにつながるように授業デザインをしていきたい。

小学４年生で、きちんと前で説明できており、感心した。中学生になったらもっとうまく発表できるはずなのに、と反省した。授業で発表する機会を設けたいと思った。

楽譜に記されている難しい記号や複雑なリズムを一つひとつ丁寧に試しながら説明されていました。中学校では、「小学校ではここまで教えていないだろう」と思っていた楽典をもっと詳しく扱っていくべきだと感じる良い機会でした。

拍子、リズム、音符について丁寧に扱い説明されていた。週１時間しかないと思うと、実技を優先しがちになるが、小学校で習得した知識を今回のように確認することも必要だと思った。

このように、校種相互の授業公開・参観を行うことで、異校種の授業について、特に児童・生徒の様子等を通して学ぶところが大きく、資料や話し合いだけからでは得られない、実際の状況を直に感じる取ることができ、実態に即した相互理解をさらに深めることができました。また、異校種の授業の様子等を知ることで、自校の授業を振り返り、小中のつながりを意識した授業づくりを考えていくためのよい機会となりました。

児童・生徒の実態を、実感を伴って理解することで、日々の授業の中で行われる指導が変わりつつあります。小学校においては、行っている学習が中学校でどのように発展していくのかを見通した指導となり、中学校においては、小学校での学びを踏まえて積み重ねていく指導となりつつあります。

その中で大切なことは、小学生から中学生になる際の新たになる気持ちを大切にしつつ、指導をしていくことです。児童・生徒にとって、環境の変化とともに新たにしている気持ちを、教師が受け止めることは、これからも小中一貫教育を充実させていく際に、大切な教員の心構えとなると感じています。

（２）小中一貫教育実践のためのプロセス　　愛川町

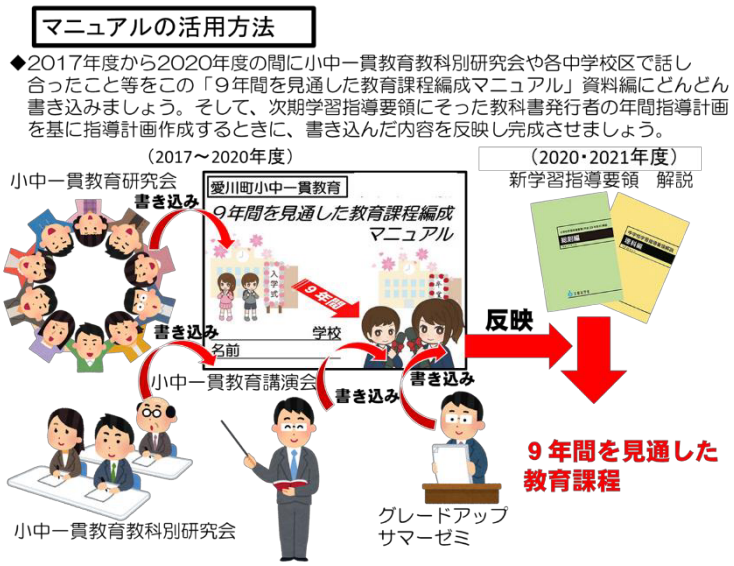
小中一貫教育を進める中では教員同士が活発な交流を図り、教育委員会と学校が連携し、条件整備を進めていきながら、次のようなプロセスを踏むことで、スムーズに実施していくことができると考えます。

ステージ１	ステージ２	ステージ３
【一貫教育に着手】 ・学び方育成カリキュラム作成のプロセスを通して、９年間で子どもを育てる意識を高め、小中一貫教育の必要性を認識する。 ・課題や目標を共有し、小中統一目標の「目指す子ども像」を設定する。 ・小中の文化の違いを理解する。 ・各校の連携可能な取組を洗い出し、実践する。	【一貫教育を強化】 ・実践した取組を更新しながら、学校相互の結びつきを強める。 ・授業、行事、研修会等の交流の質を高め、深める。 ・「目指す子ども像」の実現に向け、９年間の学びと育ちを見通したグランドデザインを作成する。	【一貫教育の充実・波及】 ・一貫教育の実践及び改善を行う。 ・実践を基に、学び方育成カリキュラムを更新し、９年間を見通した教育課程の編成を行っていく。 ・町内全域へ波及させていく。

〔ステージ１：教職員の意識向上への取組〕

教職員一人ひとりが小中一貫教育の必要性を自覚するために、愛川町教育委員会が作成した「教育課程編成マニュアル」を活用して小・中学校合同で、各教科において９年間を見通した教育課程を考えました。

９年間を見通した教育課程を作成し、小・中学校教員が「４年−３年−２年」の３つのステージで目指す子ども像を具体的にイメージし、共有することで共通認識を持ち、2021 年度から全面実施となる新学習指導要領に基づく小中一貫教育に対する意識を高めていくためのものです。

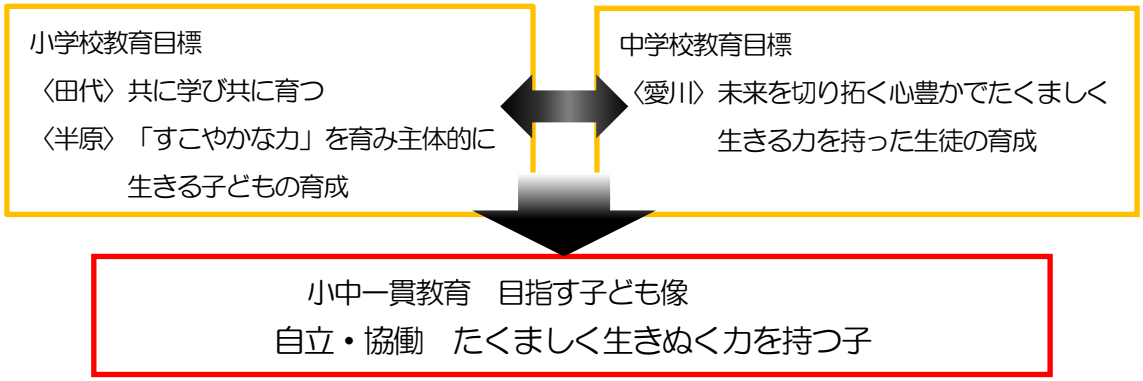


〔ステージ２：小中一貫教育グランドデザイン作成に向けた取組〕

愛川中学校区では、義務教育９年間の一貫した教育を推進するため、「目指す子ども像」を掲げ、学習活動の系統性、小・中学校同一歩調の児童生徒指導、各校教育活動の協働、教育環境等の整備に取組んでいます。

【平成 29 年度の取組】

平成 28 年度末に各小・中学校の管理職のリーダーシップのもと、教員から学区の児童生徒の実態と課題を踏まえた目指したい子どもの姿を挙げ、意見をまとめる形で「目指す子ども像」を決定しました。小・中学校の教職員には、平成 29 年度当初に伝え、目標達成に向け、今までの連携活動等から一貫性のある教育活動となるよう既存の活動を整理・調整し、実践に移しました。

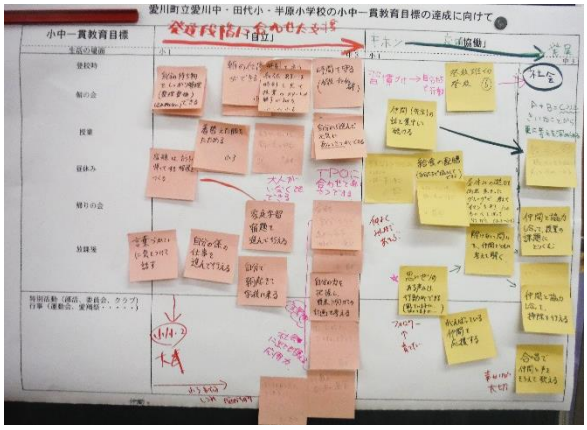


年度末に事業を見直す中で、管理職の指示によって小中一貫教育が進められているとの評価・反省を受け、平成 29 年度末から、各校の既存の組織を生かし、小中一貫教育推進組織（学力向上推進部会、児童生徒指導支援部会、交流連携推進部会）の３部会に、全教員が必ず所属する小中合同部会を組織し、研究２年目を迎えました。

【平成 30 年度の取組】

各学期に全体会や各部会を適宜開催し、組織による小中一貫教育を推進しました。また、教科別研究会の中で小・中学校各教科の系統的な指導について検討し、整備を進めました。

さらに、「目指す子ども像」を具体的な指標に落とし込むために、キーワードとなる「自立」と「協働」について、１日の生活日課の中で「自立」や「協働」を実現している姿を付箋に具体的に書き出し、それを「４年−３年−２年」の３つのステージに分け可視化することで、各ステージで児童生徒が達成すべき姿、達成しようとする言動を明確にしました。



＜参加した教員からの意見（抜粋）＞

・低学年で身に付けた力がつながっていく。

・先を見通すことができるようになると、自立につながる。

・挨拶一つを取ってみても、レベルがある。「元気のよい挨拶」→「目を見て挨拶」→「相手の状況を応じた挨拶」

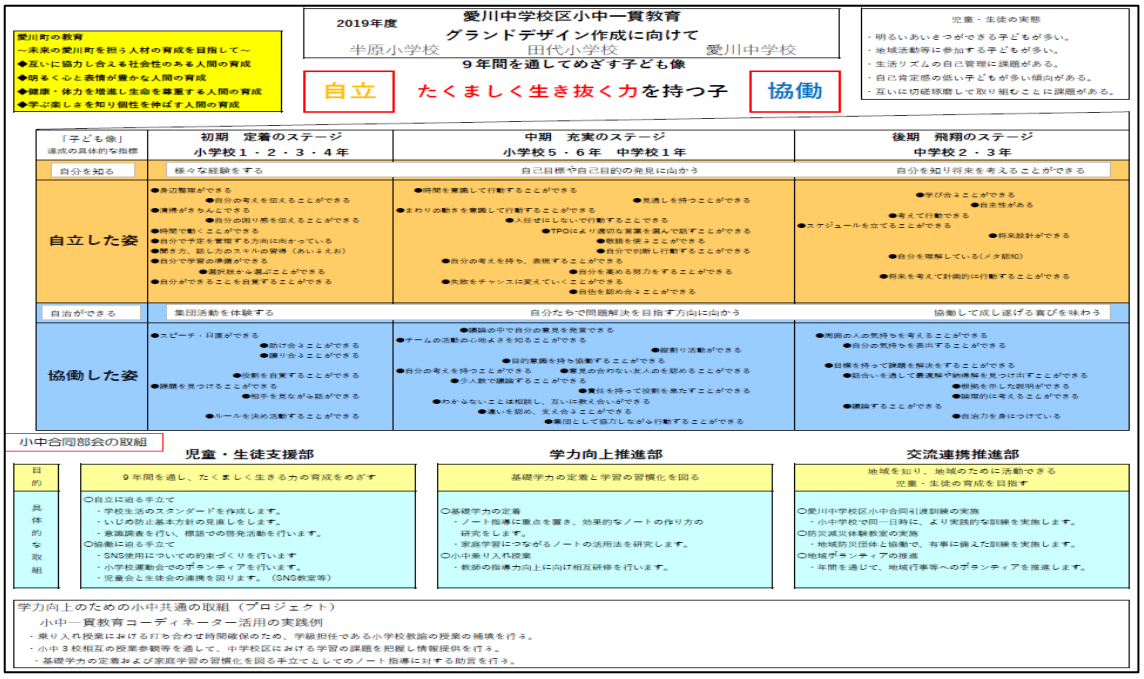
・「自立」のグレードが上がると、「協働」につながるのではないか。

・「自分を見つめる」→「自分が好きになる」→「他人を思いやる」

・教師の価値付けが必要となる。

・小学校の休み時間にみんなで遊ぶのには意味があるのか。与えられた協働で自立心が育つのか。自分たちで遊びを創造させたい。

・仲直りの仕方が分からない中学生。幼稚園で「ごめんね」「いいよ」などの型を教えるところから、小学校では自分を振り返り相談することができ、中学校では自ら行動に移すことができるようになる。



愛川町の教育
～未来の愛川町を担う人材の育成を目指して～
◆互いに協力し合える社会性のある人間の育成
◆明るく心と表情が豊かな人間の育成
◆健康・体力を増進し生命を尊重する人間の育成
◆学ぶ楽しさを知り個性を伸ばす人間の育成

2019年度
愛川中学校区小中一貫教育
グランドデザイン作成に向けて
半原小学校　田代小学校　愛川中学校
9年間を通してめざす子ども像
自立　たくましく生き抜く力を持つ子　協働

児童・生徒の実態
・明るいあいさつができる子どもが多い。
・地域活動等に参加する子どもが多い。
・生活リズムの自己管理に課題がある。
・自己肯定感の低い子どもが多い傾向がある。
・互いに切磋琢磨して取り組むことに課題がある。

「子ども像」達成の具体的な指標	初期　定着のステージ 小学校１・２・３・４年	中期　充実のステージ 小学校５・６年　中学校１年	後期　飛翔のステージ 中学校２・３年
自分を知る	様々な経験をする	自己目標や自己目的の発見に向かう	自分を知り将来を考えることができる
自立した姿	●身辺整理ができる ●自分の考えを伝えることができる ●清掃がきちんとできる ●自分の誇り感を伝えることができる ●時間を動くことができる ●自分で予定を管理する方向に向かっている ●聞き方、話し方のスキルの習得（あいうえお） ●自分で学習の準備ができる ●選択肢から選ぶことができる ●自分ができることを自覚することができる	●時間を意識して行動することができる ●見通しを持つことができる ●まわりの動きを意識して行動することができる ●人任せにしないで行動することできる ●TPOにより適切な言葉を選んで話すことができる ●敬語を使うことができる ●自分で判断し行動することができる ●自分の考えを持ち、表現することができる ●自分を高める努力をすることができる ●失敗をチャンスに変えていくことができる ●自他を認め合うことができる	●学び合うことができる ●自主性がある ●考えて行動できる ●スケジュールを立てることができる ●将来設計ができる ●自分を理解している（メタ認知） ●将来を考えて計画的に行動することができる
自治ができる	集団活動を体験する	自分たちで問題解決を目指す方向に向かう	協働して成し遂げる喜びを味わう
協働した姿	●スピーチ・対話ができる ●助け合うことができる ●譲り合うことができる ●役割を自覚することができる ●課題を見つけることができる ●相手を思ながら話ができる ●ルールを決め活動することができる	●議論の中で自分の意見を発言できる ●チームの活動の心地よさを知ることができる ●役割り活動ができる ●目的意識を持ち協働することができる ●自分の考えを持つことができる ●異見の合わない友人のを認めることができる ●少人数で議論することができる ●責任を持って役割を果たすことができる ●わからないことは相談し、互いに教え合いができる ●違いを認め、支え合うことができる ●集団として協力しながら行動することができる	●周囲の人の気持ちを考えることができる ●自分の気持ちを表現することができる ●目標を持って課題を解決をすることができる ●話合いを通して意識解決の糸口を見つけ出すことができる ●根拠を示した説明ができる ●論理的に考えることができる ●議論することができる ●自治力を身につけている

小中合同部会の取組

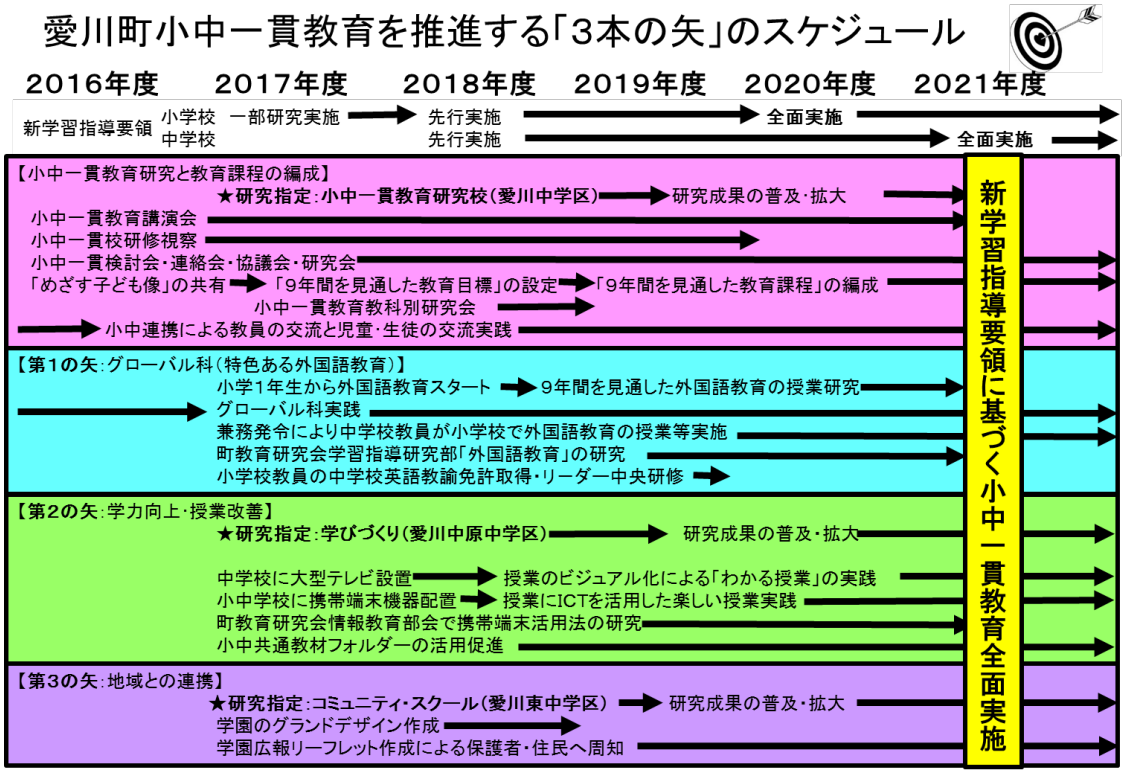
	児童・生徒支援部	学力向上推進部	交流連携推進部
目的	9年間を通し、たくましく生きる力の育成をめざす	基礎学力の定着と学習の習慣化を図る	地域を知り、地域のために活動できる児童・生徒の育成を目指す
具体的な取組	○自立に向る手立て ・学校生活のスタンダードを作成します。 ・いじめ防止基本方針の見直しをします。 ・意識調査を行い、標語での啓発活動を行います。 ○協働に向る手立て ・SNS使用についての約束づくりを行います ・小学校運動会でのボランティアを行います。 ・児童会と生徒会の連携を図ります。（SNS教室等）	○基礎学力の定着 ・ノート指導に重点を置き、効果的なノートの作り方の研究をします。 ・家庭学習につながるノートの活用法を研究します。 ○小中乗り入れ授業 ・教師の指導力向上に向け相互研修を行います。	○愛川中学校区小中合同引渡訓練の実施 ・小中学校で同一日時に、より実践的な訓練を実施します。 ○防災減災体験教室の実施 ・地域防災団体と協働で、有事に備えた訓練を実施します。 ○地域ボランティアの推進 ・年間を通じて、地域行事等へのボランティアを推進します。

学力向上のための小中共通の取組（プロジェクト）
小中一貫教育コーディネーター活用の実践例
・乗り入れ授業における打ち合わせ時間確保のため、学級担任である小学校教諭の授業の補填を行う。
・小中３校相互の授業参観等を通して、中学校区における学習の課題を把握し情報提供を行う。
・基礎学力の定着および家庭学習の習慣化を図る手立てとしてのノート指導に対する助言を行う。

〔ステージ３：町内全域への波及に向けて〕

2021 年度からの小・中学校新学習指導要領に基づく小中一貫教育全面実施に向けて、愛川町の特色ある外国語教育「グローバル科」、学力向上を目指した授業改善、地域との連携の３つの重要課題を踏まえながら、小中一貫教育の研究・実践を推進していきます。

特に小中一貫教育研究指定校区である愛川中学校区では、これまでの実践報告・検証を踏まえ、他の中学校区でも有効と思われる内容について、研修会等を通じて波及させていきます。



全校で小中一貫教育研究と教育課程編成

町立学校全校で小中一貫教育の研究に取り組んでいます。

まずは、文部科学省参与を招聘しての小中一貫教育講演会や小中一貫教育研修視察を実施し、「小中一貫教育とはどのようなもので、何をすればよいのか」を町内全ての先生が学ぶことからスタートしました。

そして「めざす子ども像」を共有し９年間を見通した教育課程を編成するために、小・中一貫教育検討会・連絡会・協議会などの会議を重ねました。

今では、小中学校教員の合同の研究会や小中学生の交流など、教員や児童生徒の交流が右の図のように、盛んに行われるようになりました。

小学生の部活動見学

第1の矢 グローバル科の創設を研究します！

外国につながりのある児童生徒が多いのが本町の特徴です。また、これからの時代は国際化が進み、グローバルな視点を持ち、ダイバーシティ（多様性）を尊重する人材の育成が必要です。

そこで、本町の特色ある外国語教育として、小学１年生から英語活動の授業をスタートさせる外国語学習と、さらに異文化を体験し理解する異文化学習との相乗効果を狙う「グローバル科」を研究していきます。

愛川町新設教科「グローバル科」について

◆異文化を尊重し、積極的に外国語を使うことができ、グローバル化社会で活躍できる人材を育成するため、外国語学習と異文化学習（生活科及び総合的な学習の時間の一部をあてる）で構成する「グローバル科」を小学1年～中学3年に新設し、9年間を見通した教育課程を編成する。

外国語学習

「外国語」を話す・聞く・読む・書く・楽しむ

	平成30年度		平成31年度	
小1	英語活動	5h	英語活動	5h
小2	英語活動	10h	英語活動	10h
小3	外国語活動	15h	外国語活動	35h
小4	外国語活動	15h	外国語活動	35h
小5	外国語活動	50h	外国語	70h
小6	外国語活動	50h	外国語	70h
中1	外国語	140h	外国語	140h
中2	外国語	140h	外国語	140h
中3	外国語	140h	外国語	140h

※スペイン語やポルトガル語等の簡単なあいさつ等も扱う。

＋

異文化学習

「異文化」を体験・理解する

	平成30・31年度
小1	生活科から2h程度
小2	生活科から3h程度
小3	総合的な学習の時間から5h程度
小4	総合的な学習の時間から5h程度
小5	総合的な学習の時間から5h程度
小6	総合的な学習の時間から5h程度
中1	総合的な学習の時間から5h程度
中2	総合的な学習の時間から5h程度
中3	総合的な学習の時間から5h程度

※生活科や総合的な学習の時間を減じて実施。

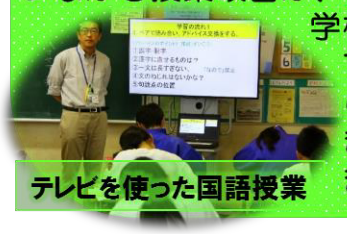
愛川中学校区では、中学校の英語科教員が小学校で「乗り入れ授業」を行い、小学３年生以上の外国語活動等の授業を大幅に増やして「グローバル科」の研究を推進していきます。

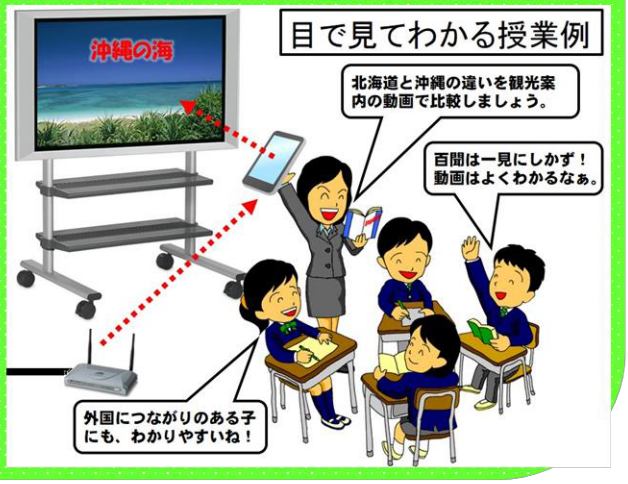
外国語教育の乗り入れ授業

第2の矢 学力向上と授業改善を進めます！

大型テレビと携帯端末機器を活用して、目で見てわかる楽しい授業の実践を小・中学校で進めています。下の図のようにインターネット上の画像や動画、教科書やノートを大型テレビに映し出して理解を深める授業がどんどん増えています。こうした大型テレビ等を活用した授業は、児童生徒からも「わかりやすい」「授業が楽しい」と、大変好評です。

愛川中原中学校区では、県の学びづくり推進地域の研究委託を受けて、児童生徒が見通しを持って主体的に学ぶための「学び方カリキュラム」を作成するなど、学力向上につながる授業改善が、小・中学校共同で進められてきています。


テレビを使った国語授業



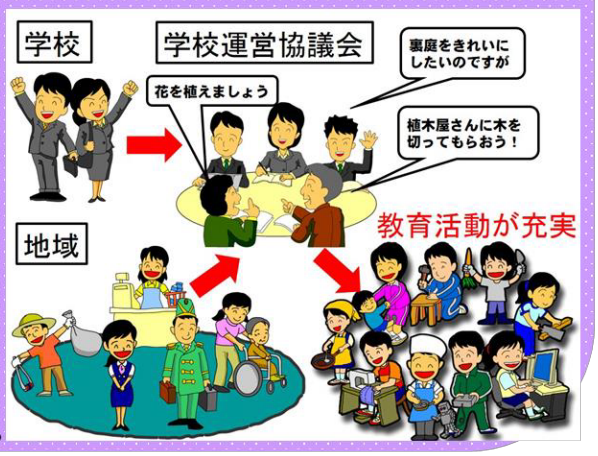
第3の矢 地域との連携をさらに深めます！

学校と地域住民・保護者が協力しながら学校の運営に取り組むことが可能となるコミュニティ・スクールの研究を愛川東中学校区でスタートしました。そのために学校運営協議会を立ち上げ、学校長が描く学校のビジョンを地域住民・保護者と共有しながら、具体的な取組が実践できるようにしました。

学校運営協議委員が地域の方々に呼びかけて、授業支援ボランティアや読書ボランティア、環境整備ボランティアや登下校の見守りボランティア等が活動を始めました。

今後、町内全ての学校がコミュニティ・スクールになります。

学校運営協議会



おわりに

本ガイドブックは、これから小中一貫教育を推進しようとしている市町村教育委員会や学校が取組のイメージが持てるように、また、現在取り組んでいる市町村教育委員会や学校の取組の改善が進むように、小中一貫教育を推進するうえでの基本的な考え方に加え、平成 27 年度から平成 29 年度までのモデル地区の実践及び平成 30 年度のパイロット地域の実践をまとめました。

小中一貫教育は、これを行うこと自体が目的ではなく、その地域の実情に合わせて、児童・生徒の豊かな「学び」と「育ち」をはぐくむための一つの手立てとして行うものです。また、小中一貫教育の根幹である義務教育９年間、そしてその前段階の幼児教育も含めた系統的な視点は、各学校で行う教育活動の充実のための大切な視点であると考えます。

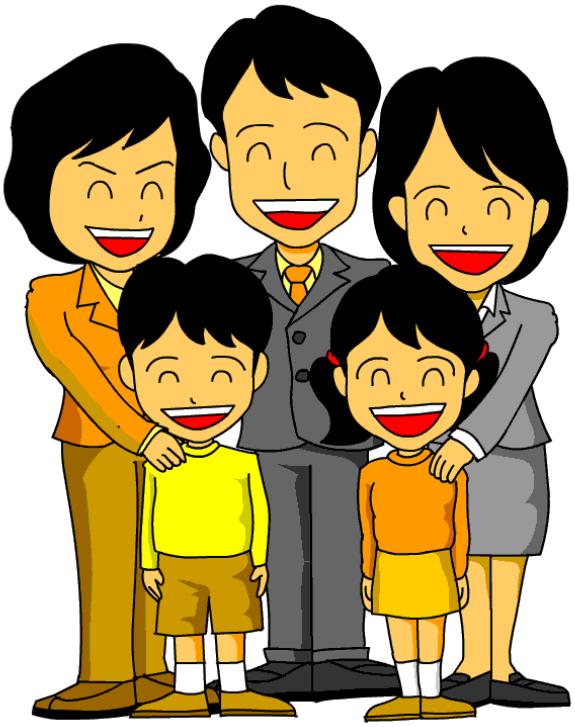
このガイドブックが、すべての学校で、教職員をつなぎ、子どもをつなぎ、学校と地域や保護者をつないで、地域とともにある学校づくりの推進につながることを願っています。

＜参考＞

小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引（平成 28 年 12 月 26 日文部科学省）
小中一貫教育推進ガイド（平成 26 年２月埼玉県教育委員会）
神奈川県としてめざす小中一貫教育校の在り方　最終報告（平成 27 年９月小中一貫教育校の在り方検討会議）

神奈川県小中一貫教育推進ガイドブック

平成 29 年３月発行
平成 30 年３月改訂（第１回）
平成 31 年３月改訂（第２回）

編集　神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課
〒231-8509
神奈川県横浜市日本大通 33
電　話　045-210-1111（内線 8217）
ＦＡＸ　045-210-8937

■本ガイドブックは神奈川県教育委員会ホームページからダウンロードすることができます。
HP アドレス　http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/cnt/f533778/